
壊れやすい人間——ハンプティ・ダンプティ——

かるピス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れやすい人間——ハンプティ・ダンプティ——

【Nコード】

N7087X

【作者名】

かるピス

【あらすじ】

ごく普通の、どこにでもいるような高校生。

過去のトラウマが少し残ってしまっているだけの彼が、全く違う世界に転移してしまう物語。

人間嫌いである彼が、無双しつつトラウマを克服していくお話……
になればいいなと思ってます。



——ハンプティ・ダンプティ 塀の上

両腕組んで 座ってる

——ハンプティ・ダンプティ 塀の上

尊大な顔で 大いばり

——ハンプティ・ダンプティ 塀の上

大あくびして 寝転がる

——ハンプティ・ダンプティ 塀の上

寝惚け寝惚けて 寝返りし

——ハンプティ・ダンプティ 塀の上

転がり落ちて 地面へと

——ハンプティ・ダンプティ 塀の下

からだをぶつけて 砕け散る――

砕け散った ハンプティ・ダンプティ

もう元には 戻らない

(マザーグース

改)

第一話（前書き）

こいつのトラウマは百八式まであるぞ!!

そんな感じの物語です。

読んでもらえると嬉しいです。

第一話



薄っぺらい人生だ。

そう思いながら、16年間生きてきた。

いや、正確には6年間か。

能天気奔放に生活していた10歳までは、そんなことは考えていなかっただろう。

変わったのは小学5年のときだ。

当時は今よりも正義感に溢れ、行動力も高く、そして、なにより、考えなしだった。

教室内で横行していたいじめを、正義のヒーロー気取りだった俺は、当然のように、愚直に、一直線に、止めに行ったのだ。

その後は言わなくてもわかるだろうと思う。

いじめられていた子への干渉はピタリと止み、代わりに、より一層陰湿さを増した、子供特有の無邪気な悪意が、俺に襲い掛かってきた。

唯一の救いは、俺がいじめから救い出した子が、いじめに加担しなかったことだ。

そう思わないとやっていられないような、酷い状態が二年間続いた。

その二年で、俺は今のようになってしまったのだと思う。

二年が過ぎて、中学に上がり、いじめがなくなってからその後も、俺は、人を信用することができなくなった。

友人がいないわけではない。

むしろ、生徒の中ではよく喋るほうだった。しかし、クラスメイト達と話し、笑っているその瞬間も、人を警戒し、疑い、睨みつけている自分がいた。

そうして生活していく内に、自分を偽って、装って、猫被っていく内に、日々が薄くなっていっていった。

透明の、しかし分厚い膜で隔てられたような、現実味のない生活。生きている場所を間違えているような違和感。

人間は、意味不明に生まれて、意義もなく生きて、理解不能に死んでいく。

いつしか俺は、そう考えるようになっていた。

そう、考えていたのだ。

あの日が、来るまでは……



ゴールデンウィーク直前。

第一期の中間テストが終わり、大型連休へ秒読みとなったその日。

ざわついた雰囲気が漂う教室で、俺は一人、帰り支度を始めていた。

連休への期待に目を輝かせ、浮かれ、騒ぎ、興奮して話している級

友達を尻目に、通学用の鞆を持ち、寮へ帰ろうとする。

過去のしがらみから逃れようと、地元、親元から遠く離れたこの学校で寮生活をしていた俺は、しかし入学最初の一ヶ月で、更生を、半ば諦めていた。

やはり、心に刻まれた傷は、容易には治癒しないようだ。

にこやかに話をしていても、どうしても人を警戒してしまう。

親切にされても、どうしても人をうたがってしまう。

そんなわけで、中学の頃と同様、広く、しかし交友関係とは呼べないほどに浅い対人関係を築いてきた俺に、クラスメイトから声がかかるはずがない。

早々に帰ろうとした。

しただが…

「ちょっと、何帰ろうとしているのよ、篠原君」

そんな俺に声を掛けてくる、ありえない人間がいた。

このクラスの仕切り屋。

委員長の端山^{はやま} 慧子^{けいこ}さん（16歳）である。

（ちなみに、同中だ。俺以外に、この地元からクソ遠い学校に来る者などいないと思っていたので、出会った時はマジびびった。）

「今からゴールデンウィークのクラス会の予定決めるんだから、帰ってもらっちゃ困るんだけど。」

知ったこっちゃない、と思いはしたものの、それを声に出すなどという愚行は犯さない。

なにせこの子、クラスメイトのみならず、先輩達や先生方、学校中から、絶大な支持を受けているのだ。

肩甲骨まで届く、綺麗なストレートの髪。

スラッと伸びた長い足。自己主張の激しい胸。

そして何より、少しきつめだが、そこがクールさを演出している、整った顔。

どこの事務所所属ですか？と思わず尋ねてしまいそうな程の美人さんなのである。

加えて勉学優秀、品行方正、誰にでも分け隔てなく接し、基本的に親切。

それなんて完璧超人？という感じの彼女。

そんな彼女を邪険に扱ったとあれば、クラスの連中が黙っていないだろう。

すまなそうな顔を装って、言う。

「ああ、ごめん端山さん。今日はちょっと剣道の道場の方の予定があって、時間がないんだ。」

これは、一応嘘ではない。

中学からいじめ対策で始めた剣道を、今も情性で続けているのだ。

「そんなに時間はとらせないから。日程調節と希望を聞くだけ。」

なおも食い下がる端山さん。

無意識なのかわざとなのか、完璧な上目使いである。

「それに、ゴールデンウィークにはもう予定が入ってるんだ。俺は参加できないよ。」

と切って捨てる俺。こちらは純度100%の大嘘だ。

「そういつていつも来ないじゃない。本当に予定なんてはいつてるの？」

痛いところをついてくるなあ。

実際、予定なんて一つもない。

「本当にもう時間がないから。」

もう強行突破する。

背後で端山さんの、あっ、という声や、クラスメイト達の声が「手前えカイザ！端山さんの誘いを断るとはどういうことだ！」「予定って何だ！女と旅行にでも行くのか！」「このリア充が！爆発しろ！」「おれだって端山さんに疑いの目で見られたい！」「罵られたい！」「踏まれたい！」「眼球ペロペロしたい！」……クラスメイト達の声が聞こえるが、無視する。

というか、後半三人警察行って来い。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

行ってしまった、と落胆する。

毎回、彼、篠原しのはら 誠在君かいざのためだけに企画しているクラス会。
3度目の失敗である。

私、端山 慧子が彼に会ったのは、小学5年のとき。

当時いじめられていた私を、唯一かばってくれたのが、篠原君だった。

その後二年間、私の代わりとしていじめられ続けた彼は、中学に入り、表面上は、元に戻ったかのように見えた。

でも、違った。

彼の内面は、やはりというべきか、かなり変化してしまっているようだった。

ずっと彼を見続けてきた私だからこそ分かる、微妙な違いがあったのだ。

笑って話をしている、一歩引いて傍観しているような、そんな彼の様子。

そして彼は、絶対に人と、身体的接触をしようとはしなかった。

私をかばってくれたばかりに、私のせいで、そんな風になってしまった彼を、何とか元の彼に戻そうと、同じ高校にまで来たのに

「忘れてるんだもんなあ……」

そう、彼はあろうことか、私のことを忘れていたのだ。

いや、正確には、私が小学生のとき自分がかばった生徒であることを、忘れているらしい。

忌むべき記憶として、出来事の大半を、無意識的に封印してしまっているらしかった。

「…端山さん。クラス会のことなんだけど……」

友達の声が、私を思考の渦から引きづり戻す。

そうだ。今は、やることがある。

友人達の方へ向き直りながら

（…いつか絶対、元に戻してやるんだから…!!）

そう、何度目になるか分からない誓いを立てる、私だった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「っだああああ。疲れたあ。」

そう言って伸びをする俺こと、篠原 誠在。

剣道場からの帰り道の途中である。

手に持っているのは、通学用の鞆と、袋に入った素振り用の木刀だ。学校から直接剣道場まで行き、今まで鍛錬していたので、学生服のまま。

夕方の、紅い日差しがまぶしい見慣れた道を、ぐだぐだ歩いている最中である。

「しかし、端山さんも毎回毎回本当にしつっこいな。」

そんなに俺を参加させたいかね？

仕事熱心でご苦労なことだ。感心してしまう。

人によく思われてどうするつもりなのだろう。

彼女のような完璧超人が、これ以上評判を上げて、何かメリットがあるのだろうか。

俺のような、交友関係の薄いやつからも支持を得たいのか？

「それとも、周りへのイメージ作りかねえ。」

と、そこまで考えて思考を停止させる。

いかんいかん。人をすぐ疑うのは俺の悪い癖だ。

そう。端山さんはナチュラルにいい人なのだ。

いい人過ぎて悪い男に捕まってしまうかないか、割と本気で心配である。

「……なんちゃって。」

まあ、俺が本気で人を心配することなんて、ないのだけれど。

いやいや、もうこの思考をやめよう。

——だんだん、日が傾いてくる——

「今日の夕飯は何かなって。」

寮で出る飯のことを考える。

昨日は、マーボー豆腐だった。

今日は……カレーか!?

——もう、太陽は、天辺しか見えない——

まさかのカレーライス!?

ひゃっほう!!!

食堂のおばちゃんは嫌いだが、おばちゃんのカレーライスは大好きだぜ!!

——日が、完全に沈む——

「……はあ……」

無理矢理ハイテンションにしてみたが、もう無理だ。もう保たん。

——だんだん、暗くなる——

「もう、面倒くせえなあ……」

——薄明の時間が、近づく——

「もう、いいや……」

——逢魔ヶ時が、来る——

「……もう、消えちまいてえなあ……」

一気に暗くなった辺り一帯。

トサツ、という音が聞こえる。

高校生が一人、歩いていた辺り。

その場にあるのは、先ほどの音の元になったと思われる、彼が持っていた通学用の鞆。

他には、何もない。

一人の男子高校生は、忽然と、その姿を消してしまっていた。

第一話（後書き）

感想、アドバイス等、お待ちしております。

第二話

「……………は…?」

…俺は確か、いつもと変わらない帰り道を、いつもと変わらないスピードで、いつもと同じようにぐったりして歩いていたはずなんだが。

……ここ、どこ?

目の前に見えるのは、樹齢何百年になるか分からないような、頭抜けて太い幹をもつ巨木。

周りを見渡すと、教室の2倍ほどの広さの空き地となっており、この巨木はその中心に位置しているようだ。

空き地は、青々と茂る、この巨木ほどではないが、それなりの大きさの大木に囲まれている。

先ほどと変わらないのは、見上げた先にある空の暗い色だけ。

それも、刻一刻と闇に包まれつつある。

…いや、さすがに俺でも、帰り道にこんな馬鹿でかい木があったら気付くだろうし、そもそも、いままで歩いてきていたアスファルトの道路がなくなっている。

鞆もなく、持っているのは袋に入った木刀だけである。

…そして、何よりも感じる違和感。

いや、正確には、違和感を感じないことに対する違和感、か。
いつも感じていた、生きている場所を間違えているような違和感が、
なくなっている。

透明の、分厚いフィルターが取り払われたかのような、以前は全く
感じていなかった、今現在ビンビンに感じている、現実感。

——かえってきた——

「!？」

突然、声のようなものが聞こえてくる。

驚いて振り向くが、後ろには、先ほどと同じように、ただ空き地が
広がっているだけ。

誰も、いない。

——おかえり——

——おかえり——

——かまって——

——かまって——

——あそんで——

——あそんで——

更に聞こえてくる声。

まるで全方位から発せられているかのような、出所の分からない、しかしはつきりと聞こえる声。

「……ゆ、幽霊い？」

心底ビビりながら出した声は、かすかに震えていた。

【カイザ・シノハラは ギフト《精霊の加護》を手に入れた】

「!？」

また聞こえてくる声。

またまた、心底ビビる俺。

今度の声は、直接頭の中に聞こえてくるような声だったが…

「…精霊？」

なんだ精霊って。なんだ加護って。

なんかギフトだかいうものを手に入れたらしいが、はっきり言って意味が分らん。

——あそんで——

——あそんで——

「……………」

また聞こえてくる声。

なにやら不機嫌そうな声色になってきている。

というか、

「…精霊って、こいつらのことか？」



「カ・イ・ザ。ほれ、言ってみ。」

——カイザ——

——カイザ——

「だからなんで伸ばすんだっての!!」

帝王、みたいな意味になっちゃってんじゃん!!」

あれから、体感で一時間は過ぎたか。

周囲はすでに真っ暗である。

空き地の上にぽっかりと開いて見える空には、満点の星が輝いている。

いやあ、実際、ここまで綺麗な空を見るのは、生まれて初めてなんじゃないのか？

そんなことを考えながら、俺は>奴等<に、自分の名前を言わせることに腐心していた。

どうやらこいつらに害意はないようで（あの謎の声によると、どうやらこいつらは《精霊》で、俺を加護してくれちゃっているらしい）、ならばと、なんとかして情報を得ようとしたのだが、こいつらの知能レベルは相当低いらしく、自己紹介さえうまくしていない。

——ていお——

——ていお——

「だから違うっての！

帝王じゃなくて、カ・イ・ザ！」

周囲が暗くなってくるにつれて、薄ぼんやりと、《精霊》達の姿が見えるようになってきていた。

姿、というか、透明の直径20cm程の球である。

俺の周りに6匹程いるこいつらは、微かに発光しているらしく、俺の周りだけ少し明るい状態になっている。

——カイ……—

「…お？」

——カイ……—

——カイ……—

「お？お！？」

くるか！！？

——カイ…ザ——

「つだああもおお！！

余分なんだっての！ちよつとじゃん！頑張れよそこ！！」

——くすくす——

——キャハハ——

…どうやらこいつら、俺をからかって遊んでいるらしい。

「……もういい……」

ふてくされて、草の上に横になる。

今更だが、明らかに、なんらかの異常が、俺の身に起こっている。しかし、今はどうしようもない。

とにかく明るくなるまで待って、何とかして元に戻る方法を…

いや、俺は、元に…戻りたいのだろうか？

元に戻っても、前の生活が、つまらない日常が、また戻ってくるだけだ。

だったら。それだったら、ここで、生きていった方が…

——ガサツ——

異音が、俺の思考をさえぎる。

「……なんだ？」

なにか大きな物体が、草の上を動いたような音だったが…

——ガサツ——

——ガサツ——

続いて、いくつもの音が聞こえる。

間違いない。ナニか、いる。

——やばい——

——まずい——

——きけん——

——にげて——

——にげて——

——にげて——

先ほどまで笑っていた《精霊》達が、口々に退避を促す。

なにか、ヤバそうな空気だ。

立ち上がり、木刀を袋から出し、構える。

——にげて——

——にげて——

立ち上がった俺を守るかのように、俺の体にまわりつく、6つの光の球。

やがて、音の主が、姿を現す。

「……なんだ、あれ…？」

出てきたのは、2 m程の体格をもつ、筋骨隆々、毛むくじらの大男。

いや、絶対に人間ではない。
裸の上半身。その上にある頭は、

猪の、ものだった。

——《オーク》——

——《オーク》だ——

——にげて——

——にげて——

《精霊》達が騒ぎ出す。

どうやら、こいつらによれば、猪頭の巨漢は、《オーク》というら

しい。

手に持った棍棒を振り上げ、鼻をひくつかせながら近づいてくる。しかも、一匹ではない。

総計5匹程の《オーク》達が、半円状に、俺を取り囲むようにして近づいているのだ。

——ドゴオオオン——

突如、爆音が俺を襲う。

威嚇のつもりなのか、一匹の《オーク》が、棍棒を地面に振り下ろしたのだ。

「……!!」

音のおかげで、硬直していた体が、少し自由を取り戻す。

なんだあれ……!!

やばいやばいやばい!!

同時に、地面が陥没するほどの一撃を見て、一気に恐怖が湧き出る。

——にげて!——

《精霊》達の声に押されるようにして、《オーク》に背を向けて走り出す。

地面に生えている草やつるに足を取られそうになりながらも、全力疾走を続ける。

背後から感じるプレッシャー。

《オーク》達の姿が見えないことが、逆にストレスになる。

（後ろを向きながらの方がよかったか……？）

今にも《オーク》達に追いつかれてしまう、そんな錯覚も覚える。

…そしてその感覚は、あながち間違っているとは言えなかった。

——しゃがんで！——

《精霊》達の声に、反射的にしゃがみこむ。

ヒュッ、となにかが高速で頭の上を通り過ぎていく。

——ボキィィィ！——

左方から、何かが折れるような音。

パッと頭を上げ、音がした方を見ると、そこには、

棍棒がめり込んでいる大木と

それを成したと思われる、《オーク》の姿があった。

「……!!」

「ブキィィィ!!」

いらだたしげに声をあげ、大木から棍棒を引っこ抜く《オーク》。

「…クソッ! どんな馬鹿力だよ!」

毒づいて立ち上がる俺。

恐怖で足はガクガクになっているが、無視して後退する。

止まったら、殺される。

(どうすりゃいんだよ! 木刀なんて役に立たねえぞ!)

パニックになりながらも、必死に考える。
どうすれば逃げ切れる?

木の上に上るか？

いや、奴らが木登りできたらアウトだ。

それ以前に、あの馬鹿力なら、木の一本へし折るくらいやってのけるだろう。

じゃあどうする？

落とし穴でも作って引っ掛けるか？

いや、無理だ。

穴を掘る道具がないし、そもそも穴を掘っている余裕がない。

では、どうする？

いい感じにパニックっている俺に、《精霊》達から声がかかる。

——みぎにいつて——

——おおごえをだして——

——たすけをもとめて——

「はぁ!？」

助けを求める？

こんな森に、こんな時間に、誰かがいるとは思えない。

それに、俺が、助けを求める？

こんな俺を、誰が助けてくれるんだ？

思考が、傾き始める。

悪いほうへ、悪いほうへと流れ始める。

考えすぎたのが悪かったのだろう。

見えにくい位置にあった木の根に躓き、転ぶ。

「!?!?!?」

まずい！

追いつかれる!!

とっさに手を突き、完全に体制が崩れることを防ぐ。

が、その拍子に木刀が手から、後方へ飛んでいってしまう。

「あ……」

放した木刀に手を伸ばす。しかし。

——バキィィ!!——

音とともに、木刀が折られる。

目の前にいるのは、折れた木刀を踏みつけている、巨体の《オーク

》。

《オーク》が棍棒を振りかぶる

動きが、やけにゆっくりに見える。

スローで動いていた棍棒がピタッと止まり、ゆっくりと振り下ろされる。

（…あ。死んだわ。俺。）

死ぬ時に走馬灯が見えるって、嘘だったんだな。

そんな、妙なことを考えながら、棍棒が振り下ろされるのを待つ。

——しなせない——

不意に、《精霊》達のそんな声が聞こえた。
同時に、体を後ろに引っ張られる。

5匹の《精霊》達が、俺を棍棒の着地点から離そうとしているのだ。
しかし、《精霊》達は力が弱く、あまり動いていない。

(……5匹?)

うまく働かない頭で考える。

《精霊》達は、全部で6匹ではなかっただろうか。
もう一匹は何処に行ったんだ？

その疑問に答えるように、視界の端から、光の球が飛んでくる。

俺と、《オーク》の間に。

「……ちょっと……！」

——にげて、いきで——

《オーク》の振り下ろした棍棒が、俺の前にいた《精霊》にぶち当たった。

第三話（前書き）

…《オーク》の鳴き声が、めっちゃ難しい……

中途半端なところで終わるんで、近日中に追加するかもしれません。

第三話

目の前にあるのは、《オーク》の振り下ろした無骨な棍棒。

そして、俺の代わりに棍棒で殴られ、拡散して光の粒子になってしまった一匹の《精霊》。

「……嘘だろ。おい。」

ひねり出したか細い声。この声に応えていたひとつの声の持ち主は、もういない。

あんな、本当にそこにいるのかも分からないような光の球のような体で、身を挺して、俺を《オーク》の棍棒から守ってくれたのだ。

「…なんで…」

なんで俺なんか守ったんだ。

そう言おうとした時だった。

【ギフト 《精霊の加護》 発動。
《の回復には時間がかかります》】

《精霊》の総数

6 ↓ 5

《精霊

(……は?)

ギフト発動? 精霊の総数? 意味が分からない。

いつかこの声の説明をもらえるのだろうか。

そんなことを混乱した頭で考えながらも、一つの言葉が、意識にとどまり続ける。

(かいふくには、じかんがかかる?)

かいふく? 回復…回復!?

治るってことか!?!?

「フシユウウ……」

頭上から聞こえる音にハッと我に返る。

そうだ。まだ《オーク》達がいるんだ。

まだ全然理解なんてしてないし、この状況をどうやって切り抜けるかなんて思いつきもしない。だが、この状況で、この絶望的な状況で、それでも分かっていることがひとつ。

生き残れば、また、あの《精霊》に会える。

何とかして生き残る。何とかして生き残って

「……礼を言わなきゃな!!」

立ち上がりながら後退する。棍棒の届きそうな範囲から抜け出し、辺りを見渡す。どうやら《オーク》達は、やはりというべきかあまり頭が良くないようで、俺を囲みもせずに先頭の《オーク》が俺を叩き潰そうとするのをただ眺めていたようだ。

俺の攻撃してきた奴を中心に、弧状に位置している。

「ヴキイイイイ!!」

再び、俺の一番近くにいた奴が、棍棒を振り上げて向かってくる。

《オーク》の速さを見る。俺との距離を把握する。

——《オーク》が近づいてくる。

《オーク》の腕の長さ、棍棒の長さを把握する。

——《オーク》が棍棒を振り下ろす。

棍棒の軌跡を予測し

避ける。

「……ブキイ？」

避けられるとは思っていなかったのだろう、《オーク》がなんで？
とでも言いたげな鳴き声をあげる。

「……なめんなよ、この豚が！」

一撃避けただけなのに、偉そうに叫ぶ俺。いまだに足はガクガクだし、やっぱりすげえ怖い。

でも、頭は冷えている。自分でも、先ほどまでパニックっていたとは思えないほどだ。

生き残る覚悟を決めて、ちょっとはましになったというところだろうか。

《オーク》達のやばさは変わっていない。一撃でも食らえば即アウトだろうし、その一撃もかなり速い。
でも、

「大きく振りかぶりすぎだ！」

言って、飛んでくる一撃をかわす。

そう、《オーク》は攻撃してくるとき、必ず大きく振りかぶる。俺だって一応剣道をやっていたんだ。それ位の隙があれば、

「避け続けることぐらいはできんだよ!!」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

冷静になって考えてみれば、分かることだった。

筋骨隆々の人外5匹 VS ひよろい現代っ子1人。

避けられるということが分かってても、根本的な解決にはなっていない。《オーク》達は、ゲーム感覚なのか、それともただ単に馬鹿なのか、複数で掛かってくることはなく、一匹づつ対処すればそれでよかった。その点は良かったが、しかし、それ以外の点は最悪だった。

今は夜の1時位だろうか、こんな時間に外に出ている人間はやはりいないらしい。

なりふり構っていらなくなり、《精霊》2匹に頼んで、辺りを探してきてもらっているが、まだ帰ってこない。死ぬよりは人に助けてもらったほうがいいかと覚悟したのだが、いらん覚悟だったらしい。

一度ミスって、攻撃を食らってしまった。またしても《精霊》に助けてもらい、生き残った。もうこいつらには頭が上がらないような

気がする。

「っうおっ!!」

横薙ぎの棍棒の一撃をしゃがむことによって回避。しゃがんだまま左斜め後ろに跳んで距離をとる。

「ツブキイイイ!!」

牙をむき出しにして、唾を飛ばしながら、《オーク》達が唸ってくる。避け始めてしばらくは奴らもそこまで本気ではないようだったが、時間が経つにつれて今のようになに本気で悔しがるようになってきた。ここまで時間を掛けてもまだ俺を捕まえないことに、相当腹を据えかねているようだ。

というか、奴らは俺を捕まえて如何する気なのだろうか。明らかに奴らの顔は肉食という感じではないのだが。猪は肉食うのか？

……食うんだろうなあ、この世界じゃ。捕まえるというか、完全に殺しにかかってるし。

少しだけ余裕ができて、逃げている間にいろいろ周りの様子を見ているが、やっぱりここは、この世界は、俺が生まれ育った場所^{せかい}ではないようだ。

異常なほど赤いきのこや、葉が青く輝いている木、チラッと目に入った馬鹿でかい蜘蛛の巣のようなものetc etc、絶対に地球ではお目にかかれないうようなものがかかりあった。

逃げている途中で、いきなり最後尾にいた《オーク》が食虫植物みたいなの、しかし縮尺間違ってるだろと言いたくなるような大きさの変な生物に咥えられたときは、本当に驚いた。《オーク》が一匹減ったから俺としては良かったのだが、ジュウツという音とともに、《オーク》の悲鳴と肉が腐るような臭いがしたときは、冗談抜きで吐きそうになった。

——ひだり——

——ひだり——

今俺のそばにいる《精霊》2匹が、俺に注意を促す。6匹全部いたときのにぎやかさはとうに無くなってしまっているが、しかし《精霊》達の注意のおかげで逃走が大分楽になっている。

「…っとおっ！まだ人は見つからないのか！？」

——まだ——

——まだ——

《オーク》の攻撃を避けながら問いかける俺に、端的に答えてくる《精霊》達。

どうやら《精霊》達は遠距離でも意思疎通ができるらしく、人搜索係の《精霊》達に何度となく連絡しているのだが、全く反応がない。

俺もかなり疲れてきている。……ずっと逃げ続けているし、当たり前か。

相当、ヤバイ状況である。

「ヴウウウウ！ブ！ブキイイ！！！」

「ブキ！ブキキ！！」

「ピギイイ！！！」

「ブキ！ピギイ！」

……どうやら《オーク》共は全然諦めてくれないらしい。
そりゃそうか。逃げ切れるほど早いわけでもなく、奴らのすぐ前で
避け続けてるだけだからな。

「……ほんとにどうすっかな……」

第四話



『なんだよお前？正義の味方でも気取っちゃってんの？キモッ！』

——ゴツン

『ホントにそういうのうざいんですけどッ！』

『困ってる人は俺が救ってやる！てか？何様のつもりだよ！』

——ガツン、ガツン

『マジで死んだほうが良いんじゃないの？』

『ぎゃはははは！！！』

『くたばっちまえ！！』

——ドスン、ガツン、ゴツン

『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』

——ガツン、ガツン、ガツン、ガツン

『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』

——ガツン、ガツン、ガツン、ガツン

『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死
んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじ
ゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』 『死んじゃえ』

——ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、
ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツ
ン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、ガツン、………

——……やめろ。やめろ！やめろ！！



「やめろおおおお………お？」

叫びながらバツと跳ね起きて、周りの風景が変わっていることに気付く。

あの悪夢のような二年間を過ごした小学校の教室ではなく、なにかの動物の皮をなめして縫って作られた、簡易テントのような狭い空間である。

「……夢？」

悪夢のような、ではなく、実際に悪夢だったらしい。ホッとため息をつく。
久々に見た夢だが、まあ、夢は夢でしかない。現実ではないのなら、別にどうと言う事はない。

少し落ち着いたところで、辺りを見渡す。

さっきも言ったように、かなり狭いテントの中だ。

上半身を起こした今の状態で、もう天井に頭がついてしまいそうである。

横幅は、人が二人、ぎりぎりで入れるくらい。それも、テント内にある色々なもので、寝るスペースが侵食されている。

鍋に、おたまのようなもの、携帯用らしき小さな皿。

コートに、靴。上着。ズボンに、女性用の下着。

毛皮に、何の獣のものだか分からない、鋭い牙。《オーク》のものだと思われる、血抜きされた頭部。

……なんだか突っ込みがいのあるものがいくつかあったが、あえて言わせてもらおう。

「……ここ、どこだ？」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

俺は確か森の中で《オーク》達と、命がけの鬼ごっこをしていた筈なんだが。決してこんな、一人暮らしでずぼらな女性が住んでいるような、確実に何かが間違ってるだろといったくなるような場所にはいなかった。

——おきた。カイザ、おきた——

——おはよう——

——おはよう——

——けがない？——

——いたみない？——

——……あたま、だいじょうぶ？——

とりあえず現状を知りたいと思い、テント内のものを物色していた俺に、声を掛けてきた存在があった。

言わずもがな、《精霊》達である。

こいつらには、生きて帰ったら礼を言おうと思っていたんだった。

というか、ちゃんと6匹全部いるじゃん。やっぱりあの後しつかりと回復したんだな。良かった良かった。

そんなことを考えている今の俺の状況、かなり、やばい。

右手に持っているのは、先ほど目に付いた、よれよれのコート。左手を伸ばしている先には、無造作に置かれている、女性用の下着。

……どう見ても。ただの。変態だ。

最後の奴には頭の心配をされてしまっている。

「……………い、いや。待て。これには深い訳があつてだな。」

しどろもどろに言い訳を始める俺。いや、ホントに、ただ見てられなくて片付けようとしてただけなんだが。いや、ホントに。他意はない。

『……………ん？声が聞こえるけど。起きたのかな？』

さらにまずいことに、外から女性の声が聞こえる。恐らく、このテナントもどきの持ち主だろう。つまり、この衣類の持ち主でもあるというわけだ。……………やべえ！

『おい。ご飯はできてるけど。体はだいじょうぶ？どっか怪我してたり…とか……………は……………』

テントもどきの入り口を開けながら聞いてくる女性。声が尻すばみに小さくなってくる。恐らく、というか確実に今の状態を見られたのだらう。どうでもいいけど、尻すばみって響きがエロいと思う。

「……な……なっ……なっ……」

驚きすぎて言葉が出てこない様子の女性。いや、まだ少女といったところか。

鮮やかな紅い髪。程よくやけている肌。少々慎ましい胸。可愛い顔立ちをしているが、第一印象は活発そうだ、という感想が出てくるような、そんな女の子だった。

……こんな子が、あんな下着を履いている、だと……！

「なにをしてるのかな、君はあああああ！！！」

これから俺は、怒り狂った少女と、対峙しなければならぬようだ。

◇
◇
◇
◇
◇
◇

「まあ、まずは、自己紹介と行こうじゃないか。」

———じこしょうかい———

———じこしょうかい———

——おなまえは？——

——としは？——

——すきなものは？——

——カイザのこと、どうおもう？——

「いきなり過ぎだし。脈絡がないし。絶対無かった事にしようとしてると思うけど。そして最後の《精霊》ちゃん。この人のことは今のところ、変態さんだと思ってるけど。」

ぐああ！やっぱりか！といって身悶えている目の前の男。いや、少年といったほうが良いと思うけど。

黒髪黒目、黒い変な上着に、これまた黒いズボン。黒黒づくしだ。

黒好きにも程があると思うけど。

年は同じくらいかな？背は私より結構高い。顔は……不本意なこと、かなり整っている。私のいない間に服に悪戯しようとする様那人なのに。理不尽かも。



昨日の夜、この森で野営していた私の元に、一匹の《精霊》がきた。《精霊》を見る機会などそうそう無い。最初はラッキーだと思っていた。だから、その《精霊》が話しかけてきたときはすごく驚いた。《精霊》と話せるのは、そういうスキルくを持っているか、《精

《霊》を強制的に支配している者だけだと思っていたから。

そして、《精霊》が助けを求めてきたときは驚きを通り越して呆れていた。

《精霊》を使役するほどの魔術師が、《オーク》ごときに逃げ回っているなんて。

しかも、《精霊》をわざわざ自分の下から離れさせるなんて。どんな馬鹿な冒険者だと思ったけど。

この年中薄暗い《薄明の森》。奥には貴重な魔術的触媒やら、高価な薬の元になる珍しい薬草やらが群生している。が、同時に《オーク》の氏族の巢も存在していて、一般人は入って来れない領域になっている。

よって、この森に入ってくるのは駆け出しに毛が生えた程度の、ランクの低い冒険者がほとんどだ。

かく言う私、ナイア・ブリスクも、やっと最近EランクからDランクに上がったばかりなんだけど。

そんなわけで、呆れつつも仕方がないから迷惑料をたんまり請求してやろうと、《精霊》の後についていった先に、彼がいた。

《オーク》4匹相手に、素手で相対している私と同じくらいの年の少年。少しの間呆然としてしまった。

先ほど《オーク》如きと言ったが、それは《オーク》のランクが理由だ。

《オーク》はDランク。つまり、Dランクの冒険者がひとりで倒せる可能性があるというくらいの強さである。

対して、《精霊》を使役できるほどの魔術師なら、最低でもAランク。《オーク》なんて相手にもならない。

しかし、目の前にいる少年は、どう見ても魔術師には見えない。それどころか、冒険者にさえ見えない。

武器を持っているようには見えないし、防具だって着ているようには見えない。完全に一般人である。

いや、一般人ではないだろう。どこの一般人が《精霊》を使役できるだろう。しかも、彼の周囲には光る球が2つ飛んでいる。明らかに《精霊》である。

……《精霊》3匹!? ありえないんだけど!!?

そして、《オーク》4匹に対する完全な位置取り。《オーク》の攻撃が全然当たっていない。すごい観察眼である。《オーク》4匹、つまりDランクの冒険者4人分の戦闘力を相手にしているということだ。

まあ、《オーク》の知能は低いから、実際はもう少し低いだろうが、それにしてもありえない。

——はやくたすけて! ——

《精霊》の声に、はっとして武器を構える。なんの変哲もない短弓トボウである。

威力と射程では>長弓ロングボウに劣るが、小回りがきき、森の中ではこちらのほうが扱いやすい。

よく分からない状況だけど、とにかく話は助けてから聞けばいい。

そう思いながら、《オーク》の頭に狙いをつけ、矢を放った。



「……というわけで、私が《オーク》を全部打ち抜いた後、君は気を失っちゃって、しょうがないからここまで運んできたってわけなの。なにか質問は？」

「……いや、ない。本当にすまなかった。君がいなかったら死んでいたな。」

「……そこは、ありがとうっていうところだと思うけど。まあ、いいや。」

あの後自己紹介を経て、変態行動の理由をきき、今の状況の説明をした。

……見てられなかったとか言われちゃった。ちょっとショック。今後は気をつけよう。

「それで？ 君はどうしてこんなところでそんな格好でうろついてたのかな？ 《精霊》を6匹も使役してるんだから、一般人ではないよね。でも、冒険者でもなさそうだし。魔術学院の生徒さんだったりするの？」

そう、彼はありえないことに、《精霊》を6匹も使役していた。いったいどれだけの魔力を持っているのか。かなり気になるところではある。

「……あゝ、うん。じつを言うと、俺もよく分かっていないんだが、
ここ、どこなんだ。」

「……はい?」

どうだろうと?

第四話（後書き）

主人公がこわれました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7087x/>

壊れやすい人間――ハンプティ・ダンプティ――

2011年11月17日19時16分発行